令和４年度の学校評価（自己評価）

前年度の重点目標		将来、テクノロ・バーサタイリストとなりイノベーションを起こす人材を育成するために １　進学・就職の両立ができる愛知総合工科高校づくり ２　生徒に寄り添う愛知総合工科高校づくり	
担当	担当の重点目標	具体的方策	評価結果と課題
１ 総務部	ア　業務・行事の運営スケジュールの見える化	・いつ何を準備し、どのように行うかを行事別でまとめる。	・業務・行事の運営スケジュールをまとめ、重複している時期を確認することができた。次年度以降の準備・実施計画で活用する。
	イ　開校 10 周年に向けた活動の立ち上げ	・開校 10 周年記念式典の実施に向け、各同窓会との連携をとり具体的なスケジュールを立てる。	・開校 10 周年記念式典の開催に関して各同窓会と令和 7 年度に実施することで合意できた。早急に実行委員会を立ち上げ、実施に向けた協議を行っていく。
２ 教務部	ア　「指導と評価の一体化」のためのカリキュラム・マネジメント	・定期的に教科・学科主任者会を開催し、シラバスの作成・改訂に取り組む。 ・生徒の実態に応じた授業改善と評価手法について継続的に検討する。	・今年度新たに２年次のシラバスを作成するとともに、１年次のシラバスについてもＰＤＣＡを実践・改訂を行った。次年度は、３年次シラバスの作成と１・２年次シラバスの検証・改訂に学校全体として取り組みたい。
	イ　確実で効率的なデータ管理システムの構築	・新校務支援システムを活用し、成績や出欠データを一元的に管理する。	・成績処理・出席データ等の管理について、新校務支援システムを用いた効率的なデータ管理に取り組んだ。今後は一層、正確で確実な成績処理の実現に向けて取り組んでいきたい。
３ 生徒指導部	ア　遅刻者数の減少	・毎朝の登校指導で生徒への声掛けを行い、遅刻者数の減少を図る。	・年間の遅刻数は、昨年が 1399 件、今年が 1356 件と横並びであった。「ゴーゴーキャンペーン」などの実施により、５分前行動を意識してできる生徒は増えた。
	イ　挨拶の励行と規範意識の向上	・生徒への声掛けをこまめに行い、挨拶の励行と規範意識の向上を図る。	・朝の挨拶運動の実施により、自発的に挨拶する生徒が増えた。次年度も継続していく。
	ウ　自ら考え、自ら律する「自律」意識の向上	・集会などの講話を通して、いじめのない学校生活や身だしなみ・言葉遣いなど、場に適した行動がとれるよう「自律」意識を向上させる。	・身だしなみ確認では、自己点検の段階で合格する生徒が増え、自律意識の向上が見られた。
４ 生徒会部	ア　生徒が主体的となり、学校行事、生徒会活動を実施する。	・議会をはじめとした各種委員会を中心に、生徒による運営を行う。 ・委員長会議を発足させ、委員会を通じて全校生徒を巻き込んだ活動を行う。	・生徒議会の企画・運営をはじめ、生徒主体の委員会を開催することができた。 ・委員長会を発足させることができたので来年度はさらに充実させていく。
	イ　部活動における年度内の目標、地域貢献活動を設定し、目標設定のための活動を行う。	・年度初めに各部活動の目標、地域貢献活動を考えさせ、ホームページへの掲載、学校掲示を行う。 ・夏休み終了後に中間達成状況、年度末に最終達成状況を部長会にて発表する。	・年間を通し各部活動の立てた目標に向かって活動することができた。

5 保健部	ア　自発的な学習環境美化意識の涵養 ・清掃活動の充実 ・美化委員会の活動 ・安全点検	・清掃道具の充実を図る。 ・安全点検、用具点検を定期的に実施する。 ・生徒美化委員会の活動を充実させる。 ・奉仕活動	・生徒美化委員は後期も清掃道具点検や教室のワックスがけを自発的かつ丁寧に行ってくれた。委員会等での啓発が良かったと感じている。また保健委員会でも様々な課題について取り組み、プレゼンテーションを通して周知できた。 ・悪天候により奉仕活動を実施できなかったことが残念であるが、別日にそれぞれの活動が行われ、より一層素晴らしい取組と感心させられた。今後も生徒の自発的な活動を促す取組を考えていきたい。
6 図書部	ア　図書館機能の充実 イ　生徒図書委員会活動の活性化	・読書センターとして、生徒の豊かな人間性を育むための図書を選定し、読書の習慣化を促す。 ・学習情報センターとして多様な図書館メディアを収集し、授業等での活用に寄与する。 ・図書当番、図書館便りの発行、図書館祭りの開催に加えて、新たな図書委員会活動を実施する。	・教員が生徒に薦めたい本、生徒が読みたい本を調査し、選定・購入ができた。引き続き生徒のためになる図書を選定していきたい。 ・図書以外の電子メディアを増やすことができた。今後は、さらに電子メディアを充実させ、授業への活用を促したい。 ・読書の習慣化を推進するための図書委員会活動を実施できた。今後も、図書委員会活動を活性化する方法を模索していきたい。
7 進路指導部	ア　企業の一次内定率や公務員の合格率の向上を目指す イ　企業内学園・技術者（専攻科含む）合格者 70 名を目指す	・キャリア教育活動等の充実「夢志クエスト」を出発点とし、キャリア教育の充実を図る。 ・T&E サポーター企業と連携したキャリア教育活動を月 1 回程度行う。 ・学習意欲をより喚起し、進路意識を高める。	・企業一次内定率 91%（昨年度 92.4%）、公務員合格率 73.7%（昨年度 70%）と一定の成果を上げることができた。また企業内学園 16 名（昨年度 14 名）、専攻科 32 名（昨年度 32 名）、技術職 15 名（昨年度 13 名）と公務員技術職を含めた合格者は 71 名（昨年度 65 名）とこちらについても重点目標を達成することができた。 ・次年度以降も、キャリア教育の充実を学年、学科等と一丸となって行い、このことを通して進路実現に向けて取り組んでいくことが必要である。
8 進学部	ア　３年後を見据えた計画的な進路指導の実現 イ「国公立大学進学 30 人」 ・愛知総合工科高校から学びの継続による工業系リーダーの育成	・３年間を見通した進路指導を行えるよう進路ホームルームや学年の進路行事を計画的に行う。 ・進路検討会を通して学年と学科間の連携を深め、生徒の進路実現の関する業務を円滑に実施する。	・学年団との連携をスムーズに行うことができた。その影響もあり、今年度は、推薦入試において国公立大学合格者を多数輩出することができた。また、推薦入試対策（小論文、面接など）を学科、関連教科の先生方に依頼するように変更した。これらの取組が進路実績向上につながったと考えられる。今後は、推薦を考えている生徒へより早い時期から入試対策準備ができるように、指導の流れを整えていきたい。
9 工務部	ア　工業に関する興味・関心を高める	・各種資格・検定試験の冊子を十分に活用して、生徒の資格・検定試験の取得に関心をもたせる。 ・キャリア教育活動を得点化し、より積極的な取組ができるように促す。 ・「夢志イノベーション　研究発表会」を通して工業科の取組を広く伝える。	・難易度の高い資格・検定試験に挑戦する生徒が増え、専門的な知識、技術・技能の習得について関心をもって取り組んでいた。 ・学科と連携してキャリア教育活動を積極的に取り組むことができた。 ・保護者、企業関係者、大学関係者へも見学していただき、規模を大きくして研究発表を行うことができた。ポスターセッションの方式や展開の仕方について今後の課題となる。

10 広報部	ア　本校の情報発信にSNSを活用 イ　ICTを活用した個別学習や協働学習の実現	・公式Twitter や Instagram を活用し、本校の授業や実習、行事、部活動などの情報を発信する。 ・課題設定や情報の収集、まとめ・表現にTeamsやロイロノートなどのオンライン共有ツールを効果的に活用し、探究のプロセスを進めていく。	・SNS活用により、情報発信のスピード力と拡散力に優れた広報効果を引き出すことができた。また、画像や動画で視覚的に本校の魅力を伝えることができた。 ・紙のレポートでは実現できないようなクラウドを活用した共同作業による資料作成や課題提出などの対話的な学びの環境を構築できた。
11 1年生	ア　基本的生活習慣の確立 イ　学力の定着	・日頃の遅刻・早退・欠席状況を把握して該当生徒への声掛けを行い、保健室や相談担当との連携も密にする。 ・フォーサイト手帳の活用を意識させ、PDCAサイクルを心掛けた生活に向けた指導を行う。 ・日頃の授業の取組状況や、定期考査の結果を活用して、学習における指導・助言を行う。 ・スタディサプリの配信計画を生徒に配布して、各教科において生徒が自発的に学習に臨む環境を生み出す。	・学年の教員で情報の共有を図り、不安を抱える生徒に対して様々な教員からアプローチをすることができた。生徒も気にかけてもらえていることを実感できる場面があったようだ。今後は教育相談担当者やスクールカウンセラーとの更なる連携を図ることが課題である。 ・手帳の良さも認めながらも、やはりタブレットによる teams 等の活用場面が多かった。連絡ツールとしてのタブレット活用だけにとどまらないことが今後の課題である。
12 2年生	ア　基本的生活習慣の確立 イ　学力の定着 ウ　卒業後の進路実現	・学年集会や担任から基本的生活習慣確立の必要性について説明し生徒に意識付けを十分に行い、欠席・遅刻・早退の数を減らす。 ・定期考査や模試、到達度テストの結果を活用し、生徒の学習に関する指導・助言を行い、学力の定着を図る。 ・残りの２年間で、卒業の進路実現をさせるために進路指導部と連携しながら、ＨＲの時間を活用して受験・就職準備をさせる。	・生徒指導部と協力し、遅刻の生徒への面談を実施担任も含め欠席を減らすために面談を実施したが、結果にはつながらなかった。本校で何を学ぶのかを考えさせ、生徒の意識の部分を変えて指導をしていく。 ・３年生は自分の進路を決定する大事な一年になる。学習習慣が身に付いている生徒は持続させ、更に上を目指す指導が重要になると感じている。まだできていない生徒は必要性を担任から指導する必要があると考えている。また、進路指導部とも協力し、自分の進路実現を考える時間を増やすことで、学校の必要性、家庭学習の定着につながっていくのではないかと考えている。担任や様々な分掌と協力し、生徒の進路実現に向けてしっかりと取り組もうと考えている。
13 3年生	ア　基本的生活習慣の確立 イ　学力の定着 ウ　卒業後の進路実現	・基本的生活習慣確立の必要性について説明し、生徒に意識付けを行う。 ・スタディサプリを積極的に活用する。各学期の配信予定表を教室に掲示して、生徒の意識付けを行い、学力の定着を目指す。 ・進路指導部と連携を図り、生徒、進路指導部員、担任の３名での進路面談の時間を設ける。	・学年集会時に、基本的生活習慣の必要性を生徒に意識付けることができたが、進路が決定後に崩れる生徒が多々見受けられた。継続的な声掛けが必要である。 ・スタディサプリは、効果的な教材であるが、生徒の取り組み姿勢により、実施効果が左右される。更なる学習効果向上のために、授業内容とリンクさせる必要がある。 ・担任と進路指導部が密に連携を図り、前もって進路指導を進めることで、目標の結果に近づくことができた。
14 理工科	ア　学びの探究 イ　進路実現の探究	・定期考査などの学習状況のデータベース化 ・学科オリジナル(理工、課題研究)の充実 ・一人１回発表 ・大学訪問、連携の強化	・面談を基にHR担任と連携をとり、学習時間の記録などから優秀な生徒を表彰し、学習意識の向上を図った。また、実習などの予備時間を利用して、進路指導を行うことができた。 ・生徒全員が文化祭においてポスターセッション形式で発表することができた。中京大学（訪問）、大同大学（オンライン）でオーラル発表をすることができた。

15 機械系学科	ア できるまでやり直す ・社会に必要とされる人 ・たくましい人 ・社会性のある人 イ 身に付ける力 ・知識 ・技能 ・社会人基礎力	・積極的に職員が生徒と関わり、個々を尊重し伸ばす指導を目指す。 ・作業が苦手な生徒には特に丁寧な対応をして理解を深めさせ、技能の習得を目指す。 ・職員が個々の生徒やグループに対して適切な課題を設定し、生徒の課題解決力を育む指導を目指す。	・３年生は課題研究を通じて、課題解決力を身に付け、それを進路実現に生かすことができた。 ・１年生と２年生は３年生の取組を見聞きすることで、ものづくりの愉しさやチームで取り組むことの大切さを知ることができた。 ・社会人基礎力を高め、ものづくりの大切さを知るためには、校内にとどまらず、多くの人との関りが大切である。インターンシップをはじめ様々な取組に参加させたい。
16 電気系学科	ア 学習指導 イ 進路指導の充実 ウ 生活指導の充実	・基礎・基本的な知識と技術を取得させる。 ・目標を定め、資格取得をさせる。 ・キャリア教育活動に参加させ、実践的な技術や知識を学ばせ、個々の生徒が目指す進路について調べさせる。 ・個々の特性を把握し、自分をうまくコントロールできる人間の育成を目指す。	・大半の生徒が知識、技術の習得ができたが、成績不振科目を抱えている生徒が若干名出てしまった。 ・８割以上の生徒が国家資格を取得することができた。（電気科） ・キャリア教育活動を実施することができた。 ・個々の生徒に応じた指導ができた。
17 建設科	ア 工業教育の強化 ・魅力ある学科づくり ・生きた学びの実践 イ 進路指導の充実	・課題研究を中心とした建設科の取組を充実させ、その内容を学校説明会やホームページを通じて、校内外へ情報発信する。 ・企業、大学等と連携し、実践的な知識、技術を学ぶ機会を設けるなど、建設業界についての興味関心を高める。 ・工業の特色を生かした大学進学、技術職公務員や企業（技術職）への就職を支援する進路指導体制を強化する。	・建築コンペでの受賞など、課題研究を通して生徒の専門性向上を図ることができた。また、その様子をＳＮＳなどで情報発信し、建設科の取組について広く理解してもらうことができた。 ・企業と連携する機会を増やし、実践的な知識、技術を学ぶ機会を提供できた。一方で、大学進学を見据えた連携にも力を入れる必要がある。 ・企業への就職に続き、技術系公務員の希望進路も実現した。また、進学指導では、国公立大学に４名合格させるなど、一定の成果を上げた。
18 応用化学科	ア ICT を活用する イ 化学の楽しさを再発見できる授業展開	・タブレットをあらゆる場面で活用する。 ・座学、実習、課題研究を通し、最新の情報を生徒に提供し、興味のわく授業展開を行う。	・新しい機器分析を利用して最新の技術に触れることができた。 ・タブレットを利用して、生徒個人の多様な表現力を見い出すことができた。 ・積極的に企業に協力してもらい、技術協力が得られた。
19 デザイン工学科	ア デザインの魅力を伝える イ 進路指導の充実 ウ 地域や企業大学との連携	・授業を通してデザイン業界や大学の特色などの情報を提供しつつ、デザインの魅力を伝える。 ・進路面談を充実させるとともに、多様な進路に対応した補習を実施して、進路実現に取り組む。 ・地域・企業・大学と連携して制作活動をするとともに、生徒の活動成果を積極的にＰＲする。	・面談を通して進路の方向性と、現実的な企業、大学を希望しているかを確認しつつアドバイスすることができたが、本人と保護者の方針の違いから、志望大学を直前まで決定できないこともあった。保護者とのコミュニケーション強化が今後の課題となった。 ・インターンシップ、地元警察署や地域商業施設との連携制作、デザイン工学科単独説明会を通して、地域への貢献とデザイン工学科の魅力を発信することができた。